

■■メールマガジン「静岡県防災」第42号■■

～富士山の噴火はどこから？～

富士山の最後の噴火は、約300年前の江戸時代中期、1707年12月16日の「宝永の大噴火」です。

宝永火口は、静岡県側から見える大きなくぼみの部分で、富士山の南東斜面、標高約2100mから3150m地点の3つの大きな火口からなっています。

また、富士山の過去の噴火履歴を調べると、様々な場所から噴火したことがわかっています。

令和3年3月に改定された富士山火山ハザードマップには想定火口範囲が示されており、この範囲のどこかに火口ができると想定されています。

また、次の噴火が、宝永の大噴火のように大量の火山灰を噴出するのか、平安時代の貞観噴火のように大量の溶岩流を噴出するのか、噴火するまでわかりません。

一方で、富士山には様々な観測機器が設置されており、観測データは気象庁に集約、24時間体制で監視されています。

その監視結果は、火山活動が活発になると噴火警戒レベルとして広く周知される他、平時からも解説資料として公開されています。

気象庁ホームページなどで、正しい情報を入手することが重要です。

●火山活動の状況（富士山）

https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/activity_info/314.html

【シンポジウムのご案内】

富士山や伊豆東部火山群の火山防災研究に尽力されている静岡大学防災総合センターの小山真人教授が今年度末で退職されます。

記念シンポジウムが開催されますので、併せて御案内いたします。

●小山真人教授退職記念シンポジウム「静岡の火山と防災ーその45年を振り返る」

<https://www.cnh.shizuoka.ac.jp/events/2023-12-6/>